

日本書紀における一字漢語サ変動詞形成漢字の意味用法

——古事記及び源氏物語との比較による——

柚 木 靖 史

はじめに

一字漢語サ変動詞形成漢字とは、一字漢語の語基からなるサ行変格活用¹の動詞のうち、漢語を形成する漢字そのものを指す。漢語が言葉²を語彙³という側面から捉えた用語であるとするならば、一字漢語サ変動詞形成漢字は表記という側面から捉えた用語⁴だということになるか。たとえば「念ず」でいえば「念」という漢字、「奏す」でいえば「奏」という漢字がこれにあたる。古事記や日本書紀など、上代の文献を対象にして、本稿では、特に一字漢語サ変動詞形成漢字という視点を設け、これを特に意味用法の観点からみていくことにより、一字漢語サ変動詞そのものの成立過程、及びその運用の実態について考えてみたいと思う。尚、本論文においては、以下、一字漢語サ変動詞形成漢字のこ

とを、形成漢字と表記していくこととする。

形成漢字は、例えば和文を基調とした源氏物語においても、三十五種類の漢字が使用され、そのなかには「奏す」の「奏」、「念ず」の「念」、「具す」の「具」のように使用数の多いものも存する。これらの漢字は、どのような経過をたどって、源氏物語などの和文において、形成漢字として使用されるようになったのか。そのことについて、日本書紀及び古事記とそれぞれ形成漢字の意味用法を比較していくことによって考えてみようとするのが、本稿の目的である。上代に成立した文献のうち、古事記の形成漢字については、既に拙稿⁵で論じたことがあるので、その結果とも比較しつつ、考察を進めていきたい。古事記は、文体からいえば和化漢文に属し、漢文とはいっても日本色が随所に認められるのに対し、日本書紀は純漢文体ともいわれ、漢

文の規範に沿ったところが多く認められる。このような文体の違いが、それぞれの形成漢字の意味とどう関わっているのかということも興味がもたれるところである。日本書紀、古事記のテキストは、いずれも日本古典文学大系（岩波書店）を使用した。⁽²⁾

一 日本書紀における形成漢字の使用状況と意味

本稿で取り上げる形成漢字であるが、ここでは便宜上平安時代和文の代表的作品である源氏物語に使われている三十五種類の漢字を取り上げることとする。その形成漢字の用例数を表1に示しておく。

〔表1〕 源氏物語における形成漢字の出現数一覧表⁽³⁾

用	要	講	調	念
1	1	3	15	67
論	勘	孝	制	奏
1	1	3	12	60
和	感	拝	請	誦
1	1	3	8	48
	死	秘	信	怨
	1	3	7	34
	動	弄	臆	具
	1	3	6	36
	難	先	興	屈
	1	2	4	25
	襟	練	困	領
	1	2	4	24
	服	按	辞	啓
	1	1	3	15

さて、これらの形成漢字を対象に、日本書紀、古事記で使用されているものと使用されていないものを調べると、

表2のようになる。表のうち、○印を付した漢字は、それが動詞として使用されていることを示し、×印を付した漢字は、名詞などで使用され、動詞としては使用されていないことを示している。備考に示したものは、日本書紀に用例が認められた場合に、それをテキストの日本古典文学大系でどう読んでいるかを示したものである。

表からもわかるように、三十五種類の形成漢字のうち、三十種類が日本書紀に使用されている。テキストでの読みは、「怨」のように「ウラム」という一語の動詞としてだけ読まれているものもあれば、「死」のように「シヌ」「マカル」「ミマカル」「ウス」「ミウス」「コロス」という複数の動詞に読まれているものもある。三十五種類の漢字のうち、日本書紀に用例の認められないものは、「按」「臆」「襟」「勘」「秘」であるが、これらの形成漢字の源氏物語での使用数をみると、「按」が一例、「臆」が六例、「襟」が一例、「勘」が一例、「秘」が三例といったように、使用数の比較的少ないものである。

さらに、形成漢字について、日本書紀と古事記での出現状況を見ると、源氏物語に使用された形成漢字三十五種類のうち、日本書紀に動詞として使用されている漢字は三十種類であるが、このうち、古事記にも使用されている漢字

は十八種類である。日本書紀で使用されている形成漢字は、全て古事記にも使用されている。日本書紀にあつて古事記にない形成漢字をみると、「領」「啓」「請」「臆」といったような、源氏物語での使用数が多い漢字も含まれている。

以上が、日本書紀、古事記、源氏物語における形成漢字の出現状況であるが、さらに意味の面から三文献の形成漢字の関係を探ってみた。

〔表2〕 日本書紀・古事記における形成漢字の使用状況

形成漢字	日本書紀	備考	古事記
念	○	オモフ オモホス	○
誦	○	アグ ヨム	○
具	○	ソナフ ナル	○
領	○	ウナガス スブ ツカフ ヒキキル ヲサム	×
調	○	シタガフ タテマツル トトノフ トトノホル	○
請	○	ウク ウケタマハル ウケフ コヒネガフ コヒマウス コフ タマハル ネガフ ネギマウス マウス マス	×
形成漢字	日本書紀	備考	古事記
奏	○	ウタフ オコス ツカヘマツル マウス	○
怨	○	ウラム	○
屈	○	オシマゲ クジク	×
啓	○	ヒラク マウス ミチヲワク	×
制	○	イサム カトル キコシメス サダム シマス ツクル フセク ミコトノリス ヤム ヲサム	○
信	○	ウク	○

動	感	要	練	弄	拝	講	困	臆	形成漢字
○	○	○	○	○	○	○	○	×	日本書紀
ウゴカス トドロカス ワナナク	ウゴク オコス ユク	カマク メヅ タケル ナゲク	チギル コトムスブ	エラブ ネラフ	マサグル モテアソブ	マク メス ヲガム	ナラフ トク	クルシブ タシナム	備考
○	○	×	×	×	○	×	×	×	古事記
難	死	勘	按	先	秘	孝	辞	興	形成漢字
○	○	×	×	○	×	○	○	○	日本書紀
カタミス ハバカル	ウス シス ミウス ヲハル カクル スグ マカル コロス			サキダツ サキニス		シタガフ	イサフ イナブ イトママウス マカリマウス ユヅル	アグ オク オコス オコル タツ ツク ツクル	備考
×	○	×	×	×	×	×	○	○	古事記

和	用	梢
○	○	×
アマナフ コタフ ヤハラゲ	スツカフ トル モチキル モテ	
○	○	×
服		
論	○	
○		
アゲツラフ イフ	キル クラフ コフ シタガフ フス タテマツル ツク ノル マツロヒシタガフ マツロフ ユルス	○
○		

まず、日本書紀における形成漢字の意味について、それぞれ用例を挙げながら考えておきたい。一つ一つの形成漢字の意味については、紙面上で詳細に検討し、意味が導き出される過程を示す必要もあるが、残念ながら紙面にそのゆとりがない。以下、大系本における当該漢字の読みとその用例数を示し、その読みが付されている用例を一例、加えてその用例における漢字の意味をそれぞれ示すに止めることとする。

1 念⁽⁴⁾〔オモフ〕十二例、「オモホス」一例

①興言念此、唯以留恨。(巻第十四 499頁10行目) 〔オモフ〕・思ふ〕

②太子恒念合大娘皇女。(巻第十三 447頁12行目) 〔オモホス〕・お思いになる〕

2 奏⁽⁵⁾〔マウス〕一四八例、「ツカヘマツル」五例、「オコス」二例、「ウタフ」一例

①時⁽⁶⁾有奏曰、欲以此皇孫代降。(巻第二 147頁9行目) 〔マウス〕・(神や天皇に) 申し上げる〕

②於是、再奏田儼。(巻第二十七 377頁11行目) 〔ツカヘマツル〕・演奏する)

③奏種種樂。(巻第二十九 415頁3行目) 〔オコス〕・演奏する〕

④今樂府奏此歌者、猶有手量大小、及音声巨細。(巻第三 199頁4行目) 〔ウタフ〕・歌う〕

3 誦〔ヨム〕二例、「アゲ」一例

① 丁卯、為天皇体不豫之、三日、誦經於大官大寺・川原寺・飛鳥寺。(卷第二十九 473頁3行目) 〔ヨム〕・読む

② 朕聞、古聖王之世、人々誦詠德之音、每家有康哉之歌。(卷第十一 391頁5行目) 〔アゲ〕・声を挙げて歌う

4 怨〔ウラム〕三例

① 今仲皇子無道、群臣及百姓、共惡怨之。(卷第十二 423頁8行目) 〔ウラム〕・怨む

5 具〔ナル〕二例、「ソナフ」一例

① 対曰、吾身具成而、有称陰元者一处。(卷第一 83頁6行目 陰神) 〔ナル〕・作られて整った姿になる

② 因以隨鳥、詣到而告之曰、吾兄々磯城、聞天神子来、則聚八十梟帥、具兵甲、將與決戰。(卷第三 207頁2行目) 〔ソナフ〕・準備し揃える

6 屈〔クジク〕二例、「オシマグ」一例

① 恒見枉屈、若納四体溝墮。(卷第十五 509頁9行目) 〔クジク〕・(他からの圧力によって) 勢いがそがれる

② 還屈其劍、投河水裏。(卷第二十一 167頁4行目) 〔オシマグ〕・曲げる

7 領〔ヒキル〕十例、「ヲサム」四例、「キル」四例、「アツカル」二例、「ツカフ」二例、「ウナガス」一例、「ス

ブ」一例

① 宜領八十萬神、永為皇孫奉護、乃使還降之。(卷第二 153頁2行目) 〔ヒキル〕・率いる

② 故汝專領東国。(卷第七 315頁12行目) 〔ヲサム〕・国を治める

③ 八月、天皇遣大將軍大伴連狭手彦、領兵數万、伐于高麗。(卷第十九 127頁1行目) 〔キル〕・率いる

④ 凡國家所有公民、大小所領人衆、汝等之任、皆作戶籍、及校田畝。(卷第二十五 273頁13行目) 〔アツカル〕・自分の所有とする

⑤ 則遣使者、喚上出雲國之土部壹佰人、自領土部等、取埴以造作人・馬及種々物形、獻于天皇曰、自今以後、以是土物更易生人、樹於陵墓、為後葉之法則。(卷第三 273頁12行目) 〔ツカフ〕・使う

⑥ 於是、百姓之不領、而扶老携幼、運材負簣。(卷第十 393頁7行目) 〔ウナガス〕・命じる

⑦ 後所率五百蝦夷等、聞天皇崩、乃相謂之曰、領制吾國天皇既崩。(卷第十四 501頁6行目) 〔スブ〕・支配する

⑧ 啓〔マウス〕四十三例、「ヒラク」三例、「ミチヲワク」一例

① 於是、天兒屋命、掘天香山之真坂木、而上枝懸以鏡作遠

祖天拔戸兒石凝戸辺所作八咫鏡、中枝懸以玉作遠祖伊弉諾尊兒天明玉所作八坂瓊之曲玉、下枝懸以粟国忌部遠祖天日鷲所作木綿、乃使忌部首遠祖太玉命執取、而広厚称辞祈啓矣。(卷第一 117頁15行目) 「マウス」・(日神に申し上げる)

② 七年春二月丁丑朔辛卯、詔曰、昔我皇祖、大啓鴻基。

(卷第四 239頁8行目) 「ヒラク」・開く

③ 是時、大伴氏之遠祖日臣命、帥大来目、督將元戎、蹈山啓行、乃尋鳥所向、仰視而追之。(卷第三 197頁4行目) 「ミチヲワク」・道を踏み分け、切り開く

9 調(「タテマツル」四例、「トトノフ」二例、「シタガフ」一例、「トトノホル」一例)

① 是歳、新羅遣使貢調。(卷第二十五 307頁3行目) 「タテマツル」・献上する

② 即巧言而調暴神、振武以攘姦鬼。(卷第七 303頁10行目) 「トトノフ」・乱れている状態を整え落ち着かせる

③ 則被神恩、頼皇威、而叛者伏罪、荒神自調。(卷第七 311頁2行目) 「シタガフ」・乱れた状態が整い落ち着く

④ 是以、陰陽開和、造化共調。(卷第二十二 189頁9行目) 「トトノホル」・乱れた状態が整い落ち着く

10 制(「カトル」三例、「ヲサム」二例、「イサム」二例、

「ヤム」一例、「シマス」一例、「ミコトノリス」一例、「サダム」一例、「フセク」一例、「ツクル」一例、「キコシメス」一例)

① 天皇親操斧鉞、授大連曰、長門以東朕制之。筑紫以西汝制之。卷第十七 37頁6行目) 「カトル」・統治する

② 夫君於天地之間、而宰万民者、不可独制。(卷第二十五 287頁3行目) 「ヲサム」・統治する

③ 庚寅、詔諸国曰、自今以後、制諸漁狩者、莫造檻絆、及施機槍等之類。(卷第二十九 419頁9行目) 「イサム」・禁止する

④ 於是、海神制曰、僮口女、從今以往、不得吞餌。(卷第二 173頁13行目) 「ヤム」・統治する

⑤ 然則、君王登天業、以安席高枕、專制萬機。(卷第九 347頁12行目) 「シマス」・統治する

⑥ 制曰、可。(卷第十五 519頁3行目) 「ミコトノリス」・詔を出す

⑦ 制礼以告成功、作樂以彰治定。(卷第十七 53頁7行目) 「サダム」・制定する

⑧ 亦不可以制新羅。(卷第十九 91頁7行目) 「フセク」・防ぐ

⑨ 是歳、制七色一十三階之冠。(卷第二十五 303頁12行目)

「ツクル」・法を制定する」

⑩皇后臨朝稱制。(卷第三十 487頁1行目)「キコシメ
ス」・統治なされる」

11 請「マウス」五十三例、「コフ」四十二例、「マス」
二十例、「ネガフ」八例、「ウケタマハル」六例、「コヒ
マウス」二例、「コヒネガフ」一例、「ネギマウス」一例、
「ウケフ」一例、「ウク」一例、「タマハル」一例

①望見皇師之威、懼不敢敵、乃潛伏其兵、權作新宮、而殿
内施機、欲因請饗以作難。(卷第三 197頁9行目)「マ
ウス」・相手に願望、依頼などを申し出る」

②請勿視之。(卷第一 93頁6行目)「コフ」・願う」

③丙午、請一百僧、読金光明經於宮中。(卷第二十九 479
頁11行目)「マス」・招く」

④請任意遊之。(卷第二 141頁11行目)「ネガフ」・願う」

⑤伏願、大王奉獻臣女韓媛與葛城宅七区、請以贖罪。(卷
第十三 459頁9行目)「ウケタマハル」・願う」

⑥因以千綰高綰、置琴頭尾、而請曰、先日教天皇者誰神也。
(卷第九 331頁8行目)「ネギマウス」・祈願申し上げる」

⑦乃取兩箇匏、投於水中、請之曰、河神崇之、以吾為幣。
是以、今吾来也。必欲得我者、沈是匏而不令泛。則吾知
真神、親入水中。若不得沈匏者、自知偽神。何徒亡吾身。

(卷第十一 395頁3行目)「ウケフ」・神意を問うために
誓約する」

⑧天皇雖独、則臣高市、頼神祇之靈、請天皇之命、引率諸
將而征討。(卷第二十八 395頁4行目)「ウク」・受ける」

⑨是以、百寮者、各往之請家地。(卷第二十九 461頁7行
目)「タマハル」・受け取る」

12 信^⑩「ウク」一例

①日本武尊信其言、入野中而覓獸。(卷第七 305頁4行目)
「ウク」・信用する」

13 興^⑪「オコス」二十八例、「タツ」十三例、「オコル」七
例、「オク」二例、「ツクル」一例、「アグ」一例、「ツク」
一例

①未幾時、武埴安彦與妻吾田媛、謀反逆、興師忽至。(卷
第五 245頁8行目)「オコス」・起こす」

②因興齋宮於五十鈴川上。(卷第六 271頁2行目)「タ
ツ」・建てる」

③更還山背、興宮室於筒城岡而居之。(卷第十一 401頁7
行目)「ツクル」・造る」

④仍興小嶋於池中。(卷第二十二 213頁4行目)「ツク」・
築く」

⑤興言念此、唯以留恨。(卷第十四 499頁10行目)「ア

グ」・(声を) 挙げる」

⑥ 蓋兵器祭神祇、始興於是時也。(卷第六 273頁1行目)
「オコル」・起こる」

⑦ 於是、天皇夙興夜寢、輕賦薄斂、以寬民萌、布德施惠、以振困窮。(卷第十一 417頁2行目) 「オク」・目が覺めて起き出す」

14 困(「タシナム」二例、「クルシブ」二例)

① 而困事於人飼牧牛馬、(卷第十五 511頁8行目) 「「タシナム」・苦しむ」

② 九月、置目老困、乞還日、氣力衰邁、老耄虛羸。(卷第十五 525頁1行目) 「「クルシブ」・苦しむ」

15 辞(「イナブ」十二例、「サル」三例、「マカリマウス」一例、「イトママウス」一例、「イサフ」一例、「ユヅル」一例)

① 大中姬命辞曰、吾手弱女人也。何能登天神庫耶。(卷第六 277頁6行目) 「「イナブ」・(申し出を) 断る」

② 其乘駿者、知伯孫所欲、仍亭換馬、相辞取別。(卷第十四 485頁12行目) 「「サル」・(別れを) 申し出る」

③ 仍辞于倭姬命曰、今被天皇之命、而東征將註諸叛者。故辞之。(卷第七 305頁1行目) 「「マカリマウス」・(別れを) 申し出る、「イトママウス」・(別れを) 申し出る」

④ 仍啓之日、大王辞而不即位。(卷第十三 435頁6行目) 「「イサフ」・(申し出を) 断る」

⑤ 遂與盤于遊田、駢逐一鹿、相辞発箭、並轡馳騁。(卷第十四 467頁11行目) 「「ユヅル」・譲る」

16 講(「トク」四例、「ナラフ」一例)

① 秋七月、天皇請皇太子、令講勝鬘經。(卷第二十二 頁6行目) 「「トク」・講義する」

② 于時、近江国講武。(卷第二十六 369頁13行目) 「「ナラフ」・学ぶ」

17 孝(「シタガフ」一例)

① 何失孝於父。(卷第二十五 309頁6行目) 「「シタガフ」・従う」

18 拜(「ヲガム」二十一例、「メス」十九例、「マク」三例)

① 因拜軍門、而告之曰、臣兄々猾之為逆状也、(卷第三 197頁7行目) 「「ヲガム」・拜謁する」

② 五十五年春二月戊子朔壬辰、以彦狭嶋王、拜東山道十五国都督。(卷第七 315頁8行目) 「「メス」・任命する」

③ 十三年春二月丁巳朔甲子、命武内宿禰、従太子令拜角鹿筒飯大神。(卷第七 351頁7行目) 「「マク」・礼拝する」

19 弄(「モテアソブ」一例、「マサグル」一例)

① 誉津別命弄是鵠、遂得言語。(卷第六 269頁6行目)

「モテアソブ」・可愛がる」

②川上臯帥、感其童女之容姿、則携手同席、拳坏令飲而戲弄。(卷第六 299頁9行目) 「マサグル」・可愛がる」

20 先¹³ 「サキダツ」四例、「サキニス」一例

①時以陰神先言故、為不祥、更復改巡。(卷第一 85頁10行目) 「サキダツ」・先に行動を起こす」

②時天鈿女復問曰、汝將先我行乎。抑我先汝行乎。対曰、吾先啓行。(卷第二 149頁6行目) 「サキダツ」・先に立つて進む」

③屯倉首語小楯曰、僕見此秉燭者、貴人而賤己、先人而後己。(卷第十五 513頁1行目) 「サキニス」・優先する」

21 練 「エラブ」一例、「ネラブ」一例

①己未年春二月壬辰朔辛亥、命諸將練士卒。(卷第三 211頁5行目) 「エラブ」・選ぶ」

②秋九月庚午朔己卯、令諸国、集船舶練兵甲。(卷第九 335頁12行目) 「ネラブ」・鍛える」

22 要 「コトムスブ」二例、「イサム」一例、「チギル」一例

①復有恃勢之男、浪要他女、而未納際、女自適人、其浪要者、嗔求両家財物、為己利者甚衆。(卷第二十五 295頁11行目) 「コトムスブ」・約束する」

②于時、伊弉冉尊恨曰、何不用要言、令吾恥辱、乃遣泉津醜女八人、一云、泉津日狭女、追留之。(卷第一 93頁9行目) 「チギル」・約束する」

③其妻固要曰、夫住吉大神、初以海表金銀之國、高麗・百濟・新羅・任那等、授記胎中譽田天皇。(卷第十七 27頁10行目) 「イサフ」・力ずくで押しとどめる」

23 感¹⁴ 「メツ」七例、「カマク」三例、「タケル」一例、「ナゲク」一例

①川上臯帥、感其童女之容姿、則携手同席、拳坏令飲而戲弄。(卷第六 299頁9行目) 「メツ」・愛でる、氣に入る」

②於是、根使主見押木珠纒、感其麗美、以為盜為己宝。(卷第十三 453頁12行目) 「カマク」・感動する」

③於是、浦嶋子感以為婦。(卷第十四 497頁13行目) 「タケル」・心高ぶる」

④逆傷岐路、重感難期。(卷第十五 525頁2行目) 「ナゲク」・嘆く」

24 死 「シヌ」七十例、「ウス」四例、「ミウス」三十例、「マカル」十一例、「ミマカル」二十例、「ヲハル」三例、「カクル」二例、「スグ」一例、「コロス」六例

①国民多死。(卷第一 89頁11行目) 「シヌ」・死ぬ」

②又賊衆戰死而僵屍、枕臂処呼為頼枕田。(卷第三 211頁

13 行目)「ウス」・死ぬ」

③ 遂沈而死焉。(卷第十一 387頁4行目)「ミウス」・お亡くなりになる」

④ 其於泉津平坂、或所謂泉津平坂者、不復別有処所、但臨死氣絶之際、是之謂歟。(卷第一 95頁5行目)「マカル」・死ぬ」

⑤ 則羞其見返、葛野、自墮輿而死之。(卷第六 267頁10行目)「ミマカル」・お亡くなりになる」

⑥ 豈久生之、煩天下乎、乃自死焉。(卷第十一 387頁14行目)「ヲハル」・死ぬ」

⑦ 是時、天国玉、聞其哭声、則知夫天稚彦已死、乃遭疾風、挙尸致天。(卷第二 137頁8行目)「カクル」・(高貴な身分の人物が)死ぬ」

⑧ 發憤称曰、何故事死王之庭、弗事生王之所也。(卷第二十 153頁5行目)「スク」・死ぬ」

⑨ 天皇大怒、詔大伴室屋大連、使来目部張夫婦四支於木、置飯座上、以火烧死。(卷第十四 463頁10行目)「コロス」・殺す」

25 動(「ウゴカス」六例、「ウゴク」五例、「トヨム」二例、「オコル」一例、「ワナナク」一例、「トドロカス」一例、「ユク」一例)

① 仍與群臣議之曰、今多動兵衆、以討土蜘蛛。(後略)(卷第七 289頁13行目)「ウゴカス」・動かす」

② 当此時、妖氣稍動、叛者一二始起。(卷第十一 417頁2行目)「ウゴク」・活発になる」

③ 而不敢動者、近羞百濟、遠恐天皇。(卷第十九 75頁11行目)「ウゴク」・行動を起こす」

④ 卅年夏六月、東夷多叛、边境騷動。(卷第七 301頁8行目)「トヨム」・騒がしくなる」

⑤ 是日、大臣病動、以不能面言於櫻井臣。(卷第二十三 223頁12行目)「オコル」・發生する」

⑥ 倉山田麻呂臣、恐唱表文將尽、而子麻呂等不来、流汗浹身、乱声動手。(卷第二十四 263頁8行目)「ワナナク」・震える」

⑦ 動鐘鼓。(卷第二十七 377頁9行目)「トドロカス」・大きな音を出す」

⑧ 於是、中納言大三輪朝臣高市麻呂、脱其冠位、擎上於朝、重諫曰、農作之節、車駕未可以動。(卷第三十 515頁1行目)「ユク」・行動を起こす」

26 難(「ハバカル」一例、「カタミス」一例)
① 所志願勿難言。(卷第十五 521頁8行目)「ハバカル」・遠慮する」

② 勅使父根等、因斯、難以面賜、却還大嶋。(卷第十七

39頁3行目) 「カタミス」・難しいと思う」

27 服¹⁶ (「マツロフ」十一例、「シタガフ」七例、「マツロヒ

シタガフ」一例、「キル」五例、「ユルス」二例、「ノル」

一例、「コフ」一例、「フス」一例、「ツク」一例、「タテ

マツル」一例、「クラフ」一例)

① 亦垂教、而綏荒俗、擧兵以討不服。(卷第五 249頁8行

目) 「マツロフ」・服従する」

② 時市乾鹿文、奏于天皇曰、無愁熊襲之不服。(卷第七

293頁2行目) 「シタガフ」・服従する」

③ 若能祭吾者、則曾不血刃、其国必自服矣。(卷第七 327

頁7行目) 「マツロヒシタガフ」・服従する」

④ 時太子服布袍取楫槽、密接度子、以載大山守皇子而濟。

(卷第十一 387頁1行目) 「キル」・着る」

⑤ 五月乙丑朔庚午、御阿胡行宮時、進賢者紀伊国牟婁郡人

阿古志海部河瀬麻呂等、兄弟三戸、服十年調役・雜徭。

(卷第三十 515頁11行目) 「ユルス」・免除する」

⑥ 又号令三軍曰、勿殺自服。(卷第九 339頁8行目) 「コ

フ」・服従することを申し出る」

⑦ 新羅王愕之服其罪。(卷第十 373頁7行目) 「フス」・

(罪に) 服する」

⑧ 服御随心、馳驟合度。(卷第十九 95頁8行目) 「ノ

ル」・(馬の背に) 乗る」

⑨ 士卒皆委心而服事焉。(卷第十九 123頁10行目) 「ツ

ク」・付き従う」

⑩ 如常且服矣。(卷第二十二 201頁2行目) 「タテマツ

ル」・(お着物を) お召しになる」

⑪ 是以、自今以後、各就親族及篤信者、而立一二舍屋于間

處、老者養身、病者服藥。(卷第二十九 439頁7行目)

「クラフ」・飲む」

28 用 (「モチキル」四十四例、「モテ」二十二例、「ツカフ」

三例、「ス」二例、「トル」一例)

① 素戔鳴尊曰、此不可以吾私用也、乃遣五世孫天之葺根神、

上奉於天。(卷第一 127頁11行目) 「モチキル」・用いる」

② 此用桃避鬼之縁也。(卷第一 99頁9行目) 「モテ」・用

いて」

③ 遂使邑有君、村有長、各自分疆、用相凌蹙。(卷第三

189頁10行目) 「モテ」・それによって」

④ 亦爰用焉。(卷第十一 415頁1行目) 「ツカフ」・用いる」

⑤ 因以、問曰、何用求蘭耶。(卷第十一 437頁5行目)

「ス」・用いる」

⑥ 于時、權用他婦、以乳養皇子焉。(卷第二 181頁4行目)

「トル」・用いる」

29 論「アゲツラフ」六例、「イフ」二例

①世云、勿論貴賤。（卷第十七 21頁8行目）「アゲツラフ」・論じる」

②夫我國家之王天下者、不論有嗣無嗣、（卷第十八 51頁10行目）「イフ」・論じる」

30 和「アマナフ」八例、「コタフ」四例、「ヤハラグ」一例

①而玖賀媛不和。（卷第十一 397頁10行目）「アマナフ」・お互いに心を通わせて仲良くする」

②陰神乃先唱曰、妍哉、可愛少男歟。陽神後和之曰、妍哉、可愛少女歟。（卷第一 83頁9行目）「コタフ」・相手の

詠んだ漢詩や歌に対してこちらも相応ずる漢詩や歌を返す」

③誘事朝廷、偽和任那。（卷第十九 75頁11行目）「ヤハラグ」・お互いに心を通わせて仲良くする」

二 古事記及び源氏物語との相互比較

以上、日本書紀における形成漢字の意味についてみてきた。これと、拙稿において既に検討した古事記における形成漢字の意味、さらには源氏物語における形成漢字の意味

とをそれぞれ対応させて示すと次の表のようになる。

「表3」 三文献における形成漢字の意味の対照表

領	屈	具	怨	誦	奏	念	
率いる 自分の所有とする 治める 人を使う 命じる	勢いが削がれる 曲げる	身に備わる 作られて整った姿になる 準備し揃える	怨む	読む 声を出して歌う（そらんじているものを口ずさむ）	神や天皇に申し上げる 演奏する	思う	日本書紀
ナシ	ナシ	準備し揃える	怨む	そらんじているものを口ずさむ	天皇に申し上げる	思う	古事記
自分の所有とする 治める	気が減入る	才能が身に備わる 準備し揃える 両親が揃う 付ける 伴う 一緒にする 付く	怨む 恨み言を言う	そらんじている ものを口ずさむ	天皇に申し上げる 演奏する	祈る 堪える	源氏物語

啓	調	制	請	信	興
天皇や皇太子、大臣等に申し上げる 開く	乱れている状態を整え落ち着かせる 乱れている状態が落ち着く 献上する	詔を出す 即位の式を挙げずに政務を摂る 統治する 防ぐ 禁止する・制止する 法を制定する	相手に願望や依頼を申し上げる 願う 祈願する 招く	信用する	発生する 起こる 発生させる 造る 建てる 起こす 築く 声を挙げる 目が覚めて起き出す
ナシ	調律する	統治する	願い事をする 頼み事をする	信用する	発生させる 事を引き起こす
三宮や皇太子に申し上げる	整え準備する 調伏する 調理する	制止する	招く	信用する	心理的に盛りあがり 行動が活発になる

困	辞	講	孝	拝	弄	先	練	要	感	死
苦しむ	(申し出を)断る (別れを)申し出る	講義する 学ぶ	従う	拝謁する 任命する	可愛がる	先に立つて進む 先に行動を起こす	選ぶ 鍛える	約束する 力づくで押しとどめる	感動する 嘆く	死ぬ 殺す
ナシ	(申し出を)断る	ナシ	ナシ	拝謁する 潔斎して護り奉仕する	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	感動する	死ぬ
困る 疲れる	職を退く	歌会などで時や歌を読み上げる	追善供養をする 拝謁する	からかう 嘲弄する	先に行動を起こす 基の先手を指す	熟練する	必要として求める	感動する	死ぬ	

動	難	服	用	和
動かす 活発になる 行動を起こす 発生する 騒がしくなる 大きな声を出す 震える	遠慮する 難しいと思う	服従する 服従することを申し出る 罪に服する 付き従う 着る 免除する (馬の背に) 乗る 飲む	用いる それによって	論じる お互いに心を通わせて仲良くする 相手の詠んだ漢詩や歌に応じて漢詩や歌を返す
鳴り響く 言い騒ぐ 動く	ナシ	服従する 着る	用いる	論じる (国家間を) 穏やかにする
動く	非難する		必要とする 飲む	論じる (氣候が) 穏やかになる

右の表から、形成漢字について、日本書紀と古事記との意味の違いをまとめると、次のようになる。

(日本書紀と古事記で意味が同じ漢字)

「念」「誦」「怨」「信」「論」

(日本書紀の漢字の意味の方が古事記より広い漢字)

「奏」「具」「制」「請」「興」「辞」「感」「死」「服」「拜」

「動」「用」

(古事記の漢字の意味の方が日本書紀より広い漢字)

ナシ

(日本書紀と古事記で意味が異なる漢字)

「調」「和」

日本書紀と古事記において形成漢字の意味を比較すると、先に掲げた項目のうちで、該当する漢字が最も多いのは「日本書紀の漢字の意味の方が古事記より広い漢字」で計十二字がこれに該当する。これに対して、古事記の漢字の意味の方が日本書紀より広い漢字は認められなかった。従って、古事記の漢字の方が日本書紀よりも狭い意味で使われる傾向にあるといえよう。

さて、次に、日本書紀と源氏物語について、形成漢字の意味を比較してみたいと思う。

(日本書紀と源氏物語で意味が同じ漢字)

「奏」「誦」「信」「弄」「論」

(日本書紀の漢字の意味の方が源氏物語より広い漢字)

「領」「啓」「制」「請」「拜」「先」「感」「死」「服」「動」
〔源氏物語の漢字の意味の方が日本書紀より広い漢字〕

「怨」「具」

〔日本書紀と源氏物語で意味が異なる漢字〕

「念」「屈」「調」「興」「困」「辞」「講」「孝」「練」「要」
「難」「用」「和」

以上の結果を見ると、最も所属する漢字の多い項目は、
「日本書紀と源氏物語で意味が異なる漢字」で、この中には、
源氏物語において使用数が最も多い「念」も含まれている。
これに続いて、「日本書紀の漢字の意味の方が源氏物語より
広い漢字」、「日本書紀と源氏物語で意味が同じ漢字」の順
に、所属する漢字が少なくなってくる。

また、日本書紀と源氏物語で、形成漢字の意味が、いず
れかの方が広いか狭いかという関係にある場合、日本書紀
の方が源氏物語より意味の広い漢字は一〇字、源氏物語の
意味の方が広い漢字は二字であることから、日本書紀の漢
字の意味が源氏物語より全てにおいて広いとはいえないも
のの、傾向としては日本書紀の漢字の意味の方が広いとい
うことになりそうである。日本書紀と源氏物語の意味が同
じ漢字、例えば「奏」「誦」「信」などが、一つ乃至二つの
意味でしか使用されていないことを考え合わせると、源氏

物語の形成漢字の意味は、概して狭いものである。

今までは、日本書紀と古事記との関係、日本書紀と源氏
物語との関係といったように、二文献ずつを比較してきた
が、ここで日本書紀、古事記、源氏物語を一括して、形成
漢字の意味について比較してみたい。ここで、日本書紀に
おいて、例えば、「念」に「思う」という一つの意味があ
り、「奏」に「神や天皇に申し上げる」「演奏する」という
二つの意味があることに基づいて、これらを計三つの意味
とするといったように、他の全ての形成漢字の意味を累算
していくと、計七十九の意味が存することになる。この七
十九の意味のうち、源氏物語の形成漢字の意味と一致する
のは、十九の意味で、約二十四パーセントになる。これに
対して、古事記でも同じように、全形成漢字の意味を累算
すると、計二十三の意味になり、そのうち源氏物語の形成
漢字の意味と一致するのは、十の意味で、約四十三パーセ
ントになる。このように、記紀と源氏物語において形成漢
字の意味をそれぞれ比較した場合、源氏物語と一致する意
味の数としては、日本書紀が十九、古事記が十と、日本書
紀の方が多いものの、意味を累算したうえで、源氏物語の
形成漢字の意味との一致度をみると日本書紀が約二十四
パーセント、古事記が四十三パーセントとなり、日本書紀

ま と め

よりも古事記の方が源氏物語との一致度が高くなる。日本書紀において、源氏物語の形成漢字の意味と一致する数が多いのは、もともと、源氏物語の形成漢字が、古事記よりも日本書紀において、より多く使用されていることによるのであろう。これは、古事記よりも、日本書紀の方が、作品としての分量が多いことに起因するところが大であらう。従って、記紀のいずれが、源氏物語の形成漢字の意味により近いかを判断する指標としては、累算した意味を相互比較することによって得られた、比率のほうで考えるべきであらう。とするならば、記紀のうち、源氏物語の形成漢字の意味と一致度が高いのは、古事記の方だとみるべきであらう。

こうみてくると、源氏物語の形成漢字にみられる意味は、日本書紀のような漢文に準じた漢字の使い方から、古事記のような、漢字の意味の和化を経て、成立していったものとみるべきもののようである。しかしなお、古事記においても、源氏物語の形成漢字の意味と一致しないものも多いことから、古事記の形成漢字と源氏物語の形成漢字の間には、大きな隔たりも存するようである。

以上、形成漢字の意味用法について古事記・日本書紀を取り上げ、特に中古成立の源氏物語の形成漢字の意味と比較する形で検討を進めてきた。前半は、特に日本書紀における形成漢字の意味について検討し、後半は、古事記や源氏物語における形成漢字の意味と比較しながら、日本書紀と古事記との違い、さらには源氏物語との違いなどを述べてきた。

検討の結果、日本書紀と古事記の形成漢字の意味には、多くの共通点が認められるものの、完全に一致するものではないことがわかった。特に、日本書紀はそれぞれの形成漢字に複数の意味が存する傾向にあり、これに対して古事記は一つの意味に限定される傾向がみられた。また、日本書紀、古事記、源氏物語の形成漢字の意味を相互に比較したところ、日本書紀と源氏物語、古事記と源氏物語では、古事記と源氏物語の方に共通する部分が多いことも分かった。

もともと中国語を書記するための漢字が、どのようにして源氏物語のような和文で、形成漢字として使われるようになったのか、まだ分からない部分もあるが、今回の調査

で、古事記において行われたような、漢字の和的使用の試みが、少なからず関与しているであろうことが分かった。今後、上代成立の他の文献、あるいは平安時代初期成立の文献などを検討しながら、和文における形成漢字がどのような経緯のもとに使用されるようになったかということについて、さらに考察を進めていきたいと考えている。

注

- (1) 拙稿「二字漢字サ変動詞形成漢字の用字法―古事記と源氏物語を比較して―」(『広島女学院大学日本文学』第9号 平成十一年七月)
- (2) 『古事記 祝詞』(日本古典文学大系1 岩波書店 校注者 倉野憲司 武田祐吉 昭和四十六年四月三十日第十五刷)『日本書紀』(日本古典文学大系 68 岩波書店 校注者 坂本太郎 家永三郎 井上光貞 大野晋 昭和六十二年二月十日 第二十四刷)
- (3) 源氏物語に使用された形成漢字については、『源氏物語大成』(中央公論社 池田亀鑑編 昭和二十八年八月三十一日発行)の索引により検索した。
- (4) 和化漢文における「念」の意味については、「思」と比較するという方法で、拙稿「和化漢文における「念」「思」の用字法」(『広島女学院大学 国語国文学誌』第二十六号 平成八年十一月)で論じた。
- (5) 日本書紀における「奏」(「申し上げる」の意)の動作の対象は、「神」「天皇」に限られる。源氏物語の「奏」も、「天皇・上皇」を対象とするので、両者の「奏」の使い方はほぼ共通している。
- (6) 漢語サ変動詞としての「誦」の意味は、拙稿「平安・鎌倉時代に於ける『誦ス』の意味用法」(『広島女学院大学日本文学』3 一九九三年七月)で論じた。
- (7) 漢語サ変動詞「具ス」の意味については、「率る」と「具す」について(森下喜一『野洲国文学』10 一九七二年九月五日)「漢語サ変動詞「具ス」の和化過程」(藤原浩史『国語学研究』28 一九八八年十二月)がある。
- (8) 源氏物語などに使用される、漢語サ変動詞としての「啓」は、「春宮や三宮、院に申し上げる」という意味であるが、日本書紀にはこれと動作の対象が異なる例が存する。因みに、日本書紀における「啓」の対象(「申し上げる」の意味の場合)を示すと次のようになる。
「皇子」二十五例 「天皇の使い」4 「連・大連」4 「皇后」3 「大臣」3 「天皇」2 「神」1 「皇子・皇后」1 (傍線を付したものが、「啓」(源氏物語)と合わない対象である)
- (9) 大系本頭注では、「請は、漢字としては『乞也・求也・告也・祈也』などと注されるが、ここでは和訓のウケフがこの事態についてあたっている」(上 398頁注五)とある。ここでは、神の真意をある現象で捉えるという内容なので、

「請」に「ウケフ」という読みが当てられたのであろうが、

「誓（ウケフ）」といった漢字を用いず「請」を使ったのは、後に続く話の内容が、聞き手に対する願望を含んでいるからなのであろう。従って、大系本中で「ウケフ」と読まれた「請」についても、「コフ」「マウス」「ネガフ」のように読まれた「請」と同じ意味だと考えてよいであろう。

- (10) 漢語サ変動詞「信ス」の意味については、「信ず」の展開「語義から見て」（『昭和学院短期大学紀要』16 一九八〇年二月）がある。

- (11) 「興」には、大きく分けて、大系本で校注者が「オコル」「アグ」と読まれているような「発生させる」、その自動詞「発生する」の意味と、「タツ」「ツクル」などと読まれているような「建てる」の意味とがある。

- (12) 「拝」のうち、大系本で校注者が「ヲガム」と読まれたものは、「伏地拝」（巻第十九 135頁10行目）、「跪拝四方」（巻第二十四 241頁10行目）、「三拝」（巻第三十 491頁7行目）などであることから、特定の儀礼的な所作を伴っていたものと思われる。

- (13) 「先」のうち、大系本の校注者が「サキダツ」と読まれたものには、時間的な先後関係を意味するものと、空間的な先後関係を意味するものがある。

- (14) 「感」は、いずれも感情の高揚することを意味しているが、「メヅ」「カマク」と読まれたもののようにプラスの心情を示すものと、「ナゲク」と読まれたもののようにマイナスの

心情を示すものがある。

- (15) 「ウゴク」と読まれた「動」には、「妖気」を主語としたような場合のように、「停滞していた状態が活発になる」とことを意味するものと、「人」を主語とした場合のように、「新たに運動を起こす」という意味とがある。前者は、状態の変化を表現したものであり、後者は行動の変化を表現したもので、意味を異にしている。尚「動」には、このような状態・行動の変化の他に、「トヨム」「トドロカス」と読まれたような「音の発生」を意味するものもある。

- (16) 「服」は、私の見た限り、一字の有する意味の数が最も多いものの一つであって、少なくとも「服従する」「着る」「免除する」「乗る」「飲む」の五つの意味が存する。